2021

テーマ

ローカルイノベーション
熊本を元気にする地方創生

LOCAL
INNOVATION

令和3年度

熊本大学熊本創生推進機構

公共政策コンペ

報告書

COMPETITION

熊本大学
Kumamoto University

KIDO
熊本創生推進機構

熊本大学熊本創生推進機構

公共政策コンペ

テーマ

ローカルイノベーション
熊本を元気にする地方創生

今回で12回目となる 熊本大学熊本創生推進機構 公共政策コンペは「ローカルイノベーション～熊本を元気にする地方創生～」と題し、地域づくりや現代社会が直面している課題に関心のある多くの方から熊本をより元気にするような政策提言を募集しました。

8/31 [TUE]

8月1日より受付開始

エントリー締切

（エントリーシート提出）

●エントリーチーム代表者が45歳以下
（チームメンバーは年齢を問いません）

10/18 [MON]

提出物締切

■政策提言概要書

■提案資料
（プレゼンテーション資料）

■プレゼンテーション動画
（10分程度の動画）

オンライン（一次）審査

上位8チームを選抜

11/20 [SAT]

発表会

上位8チーム

■口頭プレゼンテーション
（発表5分+質疑応答）

■交流会
（全エントリーチーム参加できます）

2021
Entry Team

5 社会人

5 大学生

1 高校生

11 TEAM

オンライン（一次）審査

Presentation

8 TEAM

賞

審査員によってえらばれた優秀チームには
以下の賞が授与されます。※各1チーム

- ●熊本大学賞【グランプリ】賞状・副賞（トロフィー）
- ●熊本県知事賞（賞状）
- ●熊本市賞（賞状）
- ●熊日賞（賞状）
- ●熊本商工会議所賞（賞状）
- ●市民賞（賞状）

LOCAL INNOVATION COMPETITION

2021年11月20日(土)　13:00−16:30
場所：熊本大学工学部百周年記念館
主催：熊本大学熊本創生推進機構
後援：熊本県、熊本市、熊本日日新聞社、熊本商工会議所、大学コンソーシアム熊本

オンライン・対面による ハイブリッド開催

- **挨拶**　大谷 順　熊本大学理事／熊本創生推進機構 機構長
- **発表**

チーム **チーム子飼（済々黌高校）**
テーマ 子飼商店街活性化プロジェクト
（現在少ない若者の顧客を高校生の視点から考えて取り込もう）

チーム **ゾンビランドクマモト（熊本大学・九州労働金庫）**
テーマ 「楽器コミュニティーから始める文化創生」
～自然と音楽から創出する弾みある一歩を～

チーム **やつしろ DX2nd Team12（八代市役所）**
テーマ 一歩先の防災へ、安心は作れる
～令和２年７月豪雨を踏まえた早期避難と情報の一元化～

チーム **RED LAB（熊本大学）**
テーマ 笑ってソナえて！

チーム **あらおの食を盛り上げ隊（荒尾市役所）**
テーマ 地域の食の力で子どもたちに明るい未来を
～若い世代から学ぶ！伝える！食の魅力～

チーム **渡部ゼミ②（熊本大学）**
テーマ 合志のヒーローにおれはなる！！！！
～ SNSとカフェでマンガミュージアムを合志の顔へ～

チーム **玉東町西南戦争遺跡活用チーム（玉東町教育委員会 他）**
テーマ 玉東中チャレンジSDGs「西南戦争遺跡」とまちづくりを考える子ども会議

チーム **MKレストラン同好会（熊本大学）**
テーマ 県外にいても関係ない！「MoTool（もつーる）」で地元愛をもう一度!!

- **参加者交流会**
- **審査結果発表／表彰式**
- **審査員講評**

熊本大学理事
熊本創生推進機構 機構長
大谷 順

熊本地震から5年、昨年度は球磨川流域などで豪雨災害が発生し、日本全国でも大きな災害に見舞われました。さらに新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、過疎化や高齢化が進む中の地域社会の在り方などさまざまな新しい課題も見えてきました。

熊本創生推進機構が率先して取り組んでいる地方創生においては、若者の新たな挑戦、政策提案が求められます。いろいろな方が一緒に問題を考え、解決策を見つけ、持続可能な取り組みをすることが重要ではないかと考えています。

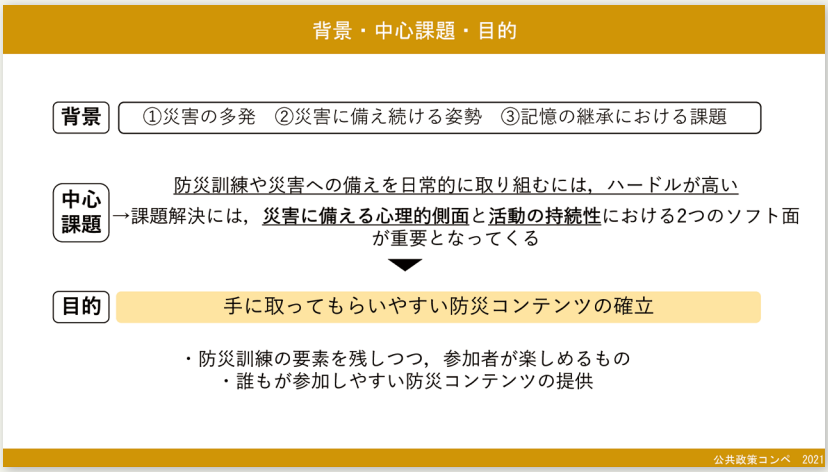
今年の政策コンペのテーマは、「ローカルイノベーション～熊本を元気にする地方創生～」です。本年度は、社会人5、大学5、高校生1、合計11チームのエントリーがありました。一次審査で8チームに絞り、そのプレゼンを皆さまと一緒に見ていきます。

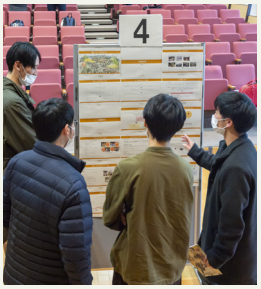
参加者の皆さんがそれぞれの立場で、地域社会の課題や地方創生に挑むふるさとの未来に、新しい可能性を見い出すことができればと考えています。皆さまも参加者の声に耳を傾け、参加者と一緒に熊本各地の地域的な課題の解決、そして地方創生のこととして考えていただき、有意義な交流の場となれば幸いです。

熊本大学賞
グランプリ

チーム **RED LAB**

テーマ **笑ってソナえて！**





「笑って、ソナえて！」というタイトルで、官・民・産・学の主体が実際に楽しみながら、学校教育、アーカイブ、ビジネスといった、災害に対する備えを通して元気になれるような提案です。防災グランピングなどの３つの施策を政策としてまとめました。

防災訓練や災害への備えを日常的に取り組むのは少しハードルが高いため、災害に備える心理的側面と活動の持続性がとても重要で、手に取ってもらいやすい防災コンテンツの確立を今回の目的としています。

施策①教育現場での新しい宿泊体験。対象地に震災の被害が大きかった益城町を例として挙げています。試験的かつ授業のカリキュラムとして、学校の先生が主な運営主体として取り組んでいくためには、経済的な支援や物資の支援も必要で、行政職員が関わってきます。機能面では、授業・講座がさまざまなカリキュラムを想定していることから、民間組織やNPOも絡めていきます。ローリングストック（防災の備品を消費、ストックを循環）によって食品の消費期限切れを防げたり、災害時に必要なものを確認できたり、物品購入による経済循環ができると考えます。

施策②みんなで作るアーカイブ事例。被災経験のある地域の人のお話を聞いて、記録・内容のアウトプットを行ない、その過程を可視化していきたいと挙げています。

また、防災学習のフィードバックとして、学習効果を高めていきたいと考えています。今回は避難所体験からアーカイブ作りという能動的なプロセス、そこで学習効果を向上していこうと考えています。次に、記憶の継承の場として活用できるという点です。防災グランピングに付加的なかたちで継承の場を創出し、入り口のハードルを下げることをやっていきます。

施策③誰もが泊まれる避難所宿泊施設。ビジネスとして益城町の産業、旅行会社、その他の民間事業に関係者として取り組んでいきます。まず地域に還元する仕組みとして、老朽化した施設を維持更新していきます。防災機能を持った施設をストックしていくことにもつながります。次に経済循環。実際に物品を購入するときも県内で購入すると、地域の経済が回っていきます。そして、事業継続費用の創出。得られた利益の一部をランニングコストに補填することで、事業として継続できるようにしていきます。

熊本県知事賞

チーム やつしろDX2nd Team12

テーマ 一歩先の防災へ、安心は作れる
～令和２年７月豪雨を踏まえた早期避難と情報の一元化～

八代市坂本町は令和２年７月豪雨で甚大な被害を受けました。多くの課題を解決するためには、市民、行政、テクノロジーを連携させることで「人的被害ゼロ、スムーズな支援・復興」が可能です。そこで提案するのは、災害対応アプリと連動した情報の一元化システムです。市民に対して早期避難を促すプッシュ通知機能、親類や行政が被災者の安否を確認できる機能、発災時から復旧・復興までリアルタイムな情報共有を行う機能、市民の状況に応じたパーソナライズな情報提供を行う機能があります。

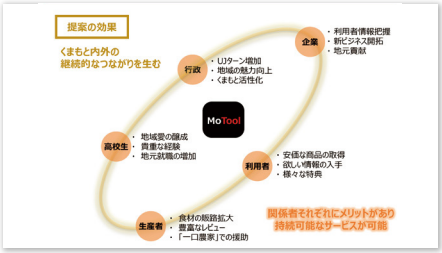
特徴は情報の「見える化」です。既存の防災アプリを活用して、周囲の状況や市民から得た情報に基づく周辺地域の避難率、行政手続が今どの段階にあるのか、次は何をすればいいのかなどを見える化する機能を搭載しました。こうした災害対応アプリと連動した情報一元化システムと既存のシステムを組み合わせることで十分実現可能です。

そのためには市民の自助・共助が必要不可欠です。自ら避難行動を取り情報を積極的に提供する。集落内の要支援者をお互いに確認し、万が一の際には助け合う。収集した情報を基に、市民に対して行政がタイムロスなく適切な支援を行い、質の高い公助を実現します。

スマートスピーカー等で情報伝達が容易になったり、災害現場でドローン等が当たり前に活躍したり、テクノロジーを市民と行政が積極的に受け入れていくことで、安心安全な八代市の実現が可能になると思います。

熊本市賞

市民賞



チーム MKレストラン同好会

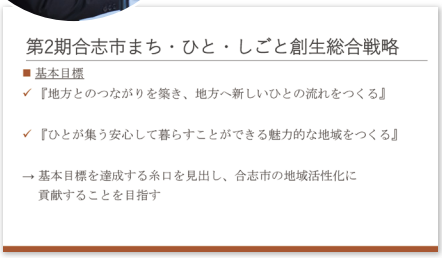
テーマ 県外にいても関係ない！「MoTool（もつーる）」で地元愛をもう一度!!

熊本から大都市圏への転出超過の原因として、熊本への愛着やつながりの希薄化、地元の情報が入ってこない、などが挙げられ、ふるさとと継続的に接点を持ってもらうことが重要です。そこで、ふるさとの「食や情報」を届けるサブスクリプション型サービスを提案します。サービスの名称「MoTool（もつーる）」は、熊本弁で「人気がある、長持ちする」の意味で、ターゲットは熊本出身の県外在住者、大学入学等熊本と関わりが深い人です。MoToolでは、くまもとの「食」と「情報」を発信します。

「食」に関しては、①県内各地の名産品を送る。利用者に地元を懐かしんでいただいたり、新たな魅力の発見につながると考えています。②新たな名産品を作る。地元の高校生の協力で名産品の企画や開発を行い、コンペを通じて商品化し、MoToolで提供します。その結果、高校生が達成感を味わい、地元について再認識することができます。③モニターとして体験する。利用者が試作品などのモニターとなり、それによって安い価格で提供が可能になり、レアな商品を楽しむことができます。

「情報」については、①利用者の知りたい情報を発信する。MoTool内のクローズドな空間であるからこそ、インターネットでは出回らないような小さな変化や地元の有益な情報を提供できます。②生産者と利用者をつなぐシステムを導入する。生産者の情報を公開して、利用者の方々に安心していただく一口農家のような制度を導入したいと考えます。

熊日賞



チーム 渡部ゼミ②

テーマ 合志のヒーローにおれはなる！！！！
～ SNSとカフェでマンガミュージアムを合志の顔へ～

合志マンガミュージアムを活用して、「地方とのつながりを築き、地方へ新しいひとの流れをつくる」「ひとが集う、安心して暮らすことができる魅力的な地域をつくる」ため、合志市の地域活性化に貢献することを目指しました。

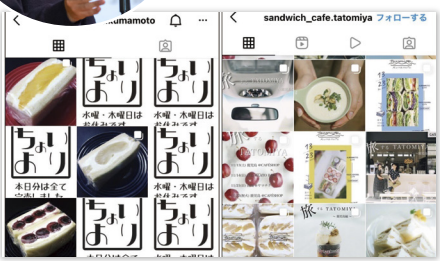
合志マンガミュージアムの課題は、①中高生の入館者数が少ない、②YouTubeやホームページ、SNS等による情報の拡散力が弱い、③地域貢献の役割が小さい、などです。そこで、「既存の公式SNSの運営方法の改善と公式Instagramの開設」と「コミュニティカフェの併設」の２つを提言します。

合志マンガミュージアムの認知を高めるため、公式Twitterの更新頻度を上げる、イベントの様子や珍しい本、人気作を写真や動画で紹介する、合志市に関連するTwitterのアカウントと連携して目にとまる機会を増やします。若い世代の利用率が高い公式Instagramも開設します。

次に、「コミュニティカフェの併設」。地域内の連携や交流を図るため、地域に密着したマンガカフェを作ります。利用者同士での交流や情報交換を大切にする交流拠点を目指すためには、訪れる人々を結び付ける触媒となるコンテンツが必要です。漫画は幅広い世代から支持されていて、国内外からも日本の文化として位置付けられていることから、触媒の役割を持たせることが可能です。

「地域に密着する」には、合志市で収穫した食材を使用する、ほかの合志市の施設と連携する、地元住民の雇用の機会を創出する、といった意味が込められています。

熊本商工会議所賞



チーム チーム子飼

テーマ 子飼商店街活性化プロジェクト
（現在少ない若者の顧客を高校生の視点から考えて取り込もう）

子飼商店街の課題は、訪れる若者が少ないこと、商店街の認知度が低いこと、興味を引くようなイベントが少ないことの３点です。アンケートでは想定よりも多い人が子飼商店街を認知していることが分かりましたが、一方で多くの人が「一度しか訪れたことがない」と回答しました。子飼商店街活性化のため５つの提言をします。①マップ作成、②SNSでの宣伝、③夜市の実施、④みんなで作る看板、⑤教育機関との連携です。

高校生に商店街に足を運んでもらうために、お勧め店舗を数店ピックアップし、お勧め商品や開店時間を記載したり、SNS班と連携してInstagramのアカウントをフォローしてもらうためにQRコードを載せたり、自転車を停められる場所を記載したりします。

全国的に見ても熊本県は多くの人がInstagramを利用していて、子飼商店街でもInstagramを利用している店舗で、投稿数が多いほどフォロワーも多くなっています。高校生のInstagramの発信にはとても大きな影響力があります。

Instagramの２枚の写真を比較すると、定休日の情報や販売情報など主に文字を用いて投稿しているものより、視覚的に商品や店の雰囲気など写真を使って投稿しているものがよく見られています。高校生は店の雰囲気などを大切にするので、閲覧者を増やすためには、お店が投稿する際みんなの目に映りやすいような写真を使う、お店の情報等は一定期間フォロワーに対して公開する、ストーリー機能も使って発信する、などが挙げられます。

チーム ゾンビランドクマモト

テーマ 「楽器コミュニティーから始める文化創生」～自然と音楽から創出する弾みある一歩を～

「楽器コミュニティーから始める文化創生」は、初心者でも簡単に演奏できるブンネ楽器で自然と共存する表現を楽しみます。現代の課題は、「子どもの脱ネット依存」と「高齢化社会による認知症防止」、「持続可能な社会実現のイノベーション創造」です。

楽器演奏は運動神経向上や、記憶力の向上、IQの向上につながり、創造的活動や癒やしとリラックスを与えます。「子供の脱ネット依存」は、いじめやうつ病防止につなげます。「高齢化社会による認知症防止」は、避けられない高齢化社会を元気で健康なものしたいと考えています。「持続可能な社会実現のイノベーション創造」は、創造性あふれる人材を生み出し、自然あふれる熊本県で楽器演奏の文化を創出し、元気なまちづくりで未来を見据えた一歩を奏でます。

ANIMAプロジェクトから、楽器レンタル事業、コミュニティー創造事業、NFT事業を挙げ、ブンネ楽器から始める音楽と熊本県での自然との共生から、創造性あふれた考える力を持つ人材やコミュニティーを生み出していきます。

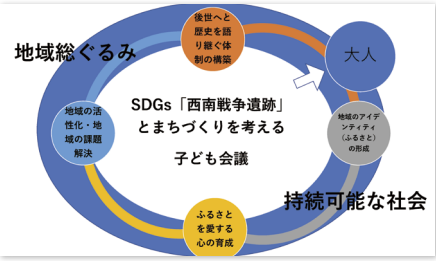
チーム あらおの食を盛り上げ隊

テーマ 地域の食の力で子どもたちに明るい未来を～若い世代から学ぶ！伝える！食の魅力～

若い世代は日常の食の大切さや必要性を感じておらず、行政サービスをうまく活用できていません。課題として、若い世代の食に関する知識・技術を身に付け、食習慣を改善したり、若い世代に向けた行政情報やサービスの周知方法を改善する必要があります。

高校生と連携した食育の取り組みを進め、食や健康に関する現状と課題を学ぶ機会を設け、自分の体を大切にする意識付けをし、日常生活での実践を目指します。そして、高校生食育アドバイザーの育成やInstagramを活用した情報発信を提案します。

課題解決後は、健康教育を推進することで正しい食習慣の形成、将来的な生活習慣病の予防や医療費削減が見込めます。また、高校生食育アドバイザーの活動や食を体験できるプログラムを通して、食を選択する力、食行動の改善を図るとともに、地域との関わりを深めることができます。若い世代におけるSNSの活用は、市民間のつながり、行政とのつながりを保つことができると同時に、コロナ禍のような予測できない状況に左右されない食育推進も期待できます。



チーム 玉東町西南戦争遺跡活用チーム

テーマ 玉東中チャレンジSDGs「西南戦争遺跡」とまちづくりを考える子ども会議

玉東町にはたくさんの史跡が残り、中でも国指定史跡西南戦争遺跡は町域全体に広がっています。

町では10年前からこれらの価値を掘り起こし、地域おこしの素材とすべく、遺跡を活用した取り組みを行っています。

戦後144年を経て、地域の人と西南戦争という出来事の間に隔たりが出てきています。

遺跡を守ってきた世代は高齢化し、戦争というダークなイメージで史跡に価値を見いだせない人も増えています。「玉東中チャレンジSDGs『西南戦争遺跡』とまちづくりを考える子ども会議」は、若年層、特に玉東中の子どもたちを対象に、自分たちの生まれ育った地域について知り、まちづくりを展開していくというプロジェクトです。

子どもたちには、地域や世界の課題を考えながら史跡の整備活用というまちづくりの一端を担うことで、それを自分事として捉え、史跡やまちに親しみ、愛着を持ってもらいたいというのが狙いです。地域を愛する人々を増加させ、定住促進や産業の活性化などしっかりしたまちの基盤形成につながることを期待しています。

質疑応答 & 交流会

チーム子飼

子飼商店街活性化プロジェクト
（現在少ない若者の顧客を高校生の視点から考えて取り込もう）

Q 発表中にあったマップ作成で、大学生向け、高校生向けを分けて作成するということだったのですが、どの辺の情報を分けて作成するイメージをお持ちなのか教えてください。

A 現在、若者が子飼商店街に訪れることが少ないとお伝えしたのですが、比較的、大学生は訪れていて、高校生以下はあまり訪れていないです。そのことから、高校生向けのマップは、商店街にどういうお店があるかというような基本的な情報を掲載し、大学生向けマップは、より踏み込んだ情報を掲載して作成しようと考えています。

やつしろ DX2nd team12

一歩先の防災へ、安心は作れる
～令和２年７月豪雨を踏まえた早期避難と情報の一元化～

Q スマートフォンを活用するイメージですが、実際には、高齢者やスマートフォンを活用できない様々な方がおられます。そのような方々にはどのようにアプローチされますか。

A その課題解決方法は２つ考えています。
一つは、自助・共助を大切にし、地域の周りの皆さんでサポートし合いながら、スマートフォン・アプリ等をうまく使える人がサポートするというものです。
もう一つは、アプリだけに頼るのではなく、既存の電話・ホームページ・ケーブルテレビ等の手段も用いながら、情報への複数のアクセス手段を整えるものです。
誰も取り残すことがないような仕組みを考えております。

ゾンビランドクマモト

「楽器コミュニティーから始める文化創生」
～自然と音楽から創出する弾みある一歩を～

Q 今回の発表で初めてブンネ楽器のことを知りました。実際にブンネ楽器を用いた活動を普段されていらっしゃるのでしょうか？

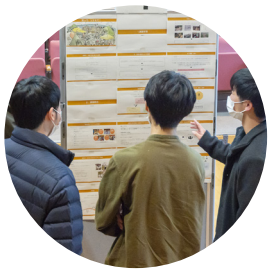
A まだ実際の活動は行っておりません。
楽器演奏の楽しさを地方創生に生かせないかと調べておりましたら、ブンネ楽器というものを見つけました。高齢者の認知症防止や子どもの教育にも良い影響を与え、簡単に始められる「ブンネ楽器」と「自然」を組み合わせ、表現の自由な場所をつくりたいと思い、今回の政策提言につなげました。

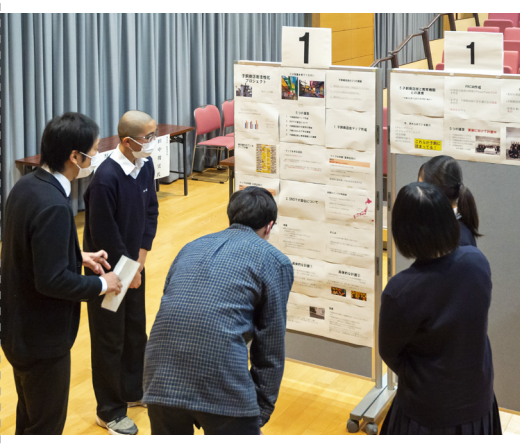
RED LAB

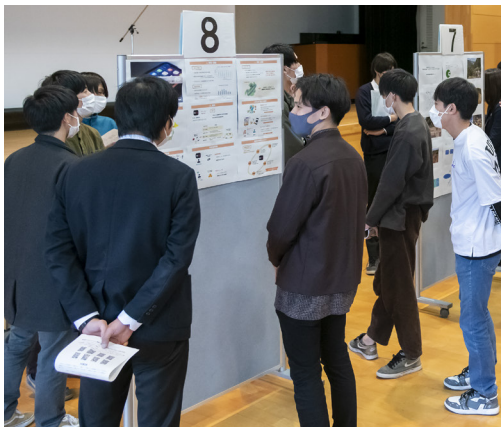
笑ってソナえて！

Q 笑顔で参加できて避難訓練等を行えるというコンセプトは非常にいいなと思いました。今回の提言のターゲットはお子さんや若者だと思うのですが、いかに地域の住民を巻き込んで避難にいくかというところに何かアイデアはありますか。

A 実際にどう避難させるかというところまでは、まだ具体的には踏み込んで検討できていませんでした。地域の自治会等を巻き込んで、避難行動のプログラムとしてどのようにやっていくか、さらに検討が必要だと感じました。







あらおの食を盛り上げ隊

地域の食の力で子どもたちに明るい未来を
～若い世代から学ぶ！伝える！食の魅力～

Q 食育アドバイザーはとても面白い考えだと思います。高校生の反応というか、実際にうまくいきそうかどうか感触としてはいかがでしょうか。

A 取り組み自体は、まだスタートしていないのですが、市内の高校の先生方にお話したところ、サークルや部活動の一環で、気軽に取り組めるような活動の始め方であればできそうだというお声をいただきました。また、地域にいらっしゃる食生活改善推進員という食のボランティアさん等と協力して、地域の行事やイベントでの参加からという簡単なスタートを設定して、始めさせていただければと考えております。

玉東町西南戦争遺跡活用チーム

玉東中チャレンジ SDGs
「西南戦争遺跡」とまちづくりを考える子ども会議

Q 今回の提言の目的は、地元を出ていく中学生に地元の郷土愛を育んでほしいということであり、すでに取り組んでいらっしゃると思いますが、子どもたちへの効果がありましたら教えてください。

A 今年度から取り組んでいる事業で、中学校１年生の子どもたちと夏休みには一緒に動画撮影などしたのですが、知らないことを知る喜びということを学び、体験し、その後、いろんな方に知っていただくというところで、即効性を持って自分たちのまちについて誇りを持てるようになっていると感じております。また、自分たちの自己肯定感にもつながっているように思います。

渡部ゼミ②

合志のヒーローにおれはなる！！！
～ SNSとカフェでマンガミュージアムを合志の顔へ～

Q アンケートの結果から、小学生の利用者数は多いけれど中高生は利用者数が減っています。これは、何が影響していると思われますか。

A 特に高校生については合志市の中に（高等専門学校はあるものの）高校がなく、学校から帰る頃には、すでにミュージアムは閉まっており利用できない状況が推察されます。

Q 今回の分析で、地元の小学生に愛されているミュージアムだということがはっきりしただけでも、政策提言の方向性が明確になったのではないかなと思います。地元で漫画文化を愛する子どもたちを育てるという意味で、マンガミュージアムとカフェを一緒にして、地域に愛されるものにしていくという提案は、とても意味があると思うので、もっとそこを協調した発表にしたほうが良かったと思います。

MKレストラン同好会

県外にいても関係ない！
「MoTool（もつーる）」で地元愛をもう一度!!

Q 情報を売るということについて、これほど情報が手軽に入手できる世の中でどれくらいレアな情報が集められるか。逆に言うと、そのレアな情報をターゲットになっている方々が欲しがるか。その辺が少しネックになるのかなと思いました。何かお考えがあれば教えてください。

A 情報の提供については、より知りたい情報を、サブスクリプションのレコメンド機能等を用いてターゲットに近づけたりすることを考えています。あとは、どのような情報を欲しているかについては、運用する中での分析で分かってくると考えますので、そういったところを生かしながら改善していきたいと考えています。

講 評

熊本大学熊本創生推進機構の教員、行政機関・民間企業・民間団体の有識者数名を審査員とし、政策提言（政策提言概要書、プレゼンテーション資料・動画）、口頭プレゼンテーション、各審査員との質疑応答の結果を６点の評価視点によって審査します。

❶課題の重要性
❷研究的視点
❸提案内容の元気さ・前向きさ
❹提案内容のユニークさ
❺提案内容における市民の視点
❻発表について

熊本県 企画振興部 政策審議監
厚地 昭仁 氏

受賞された皆さん、おめでとうございます。今回残念ながら受賞されなかった皆さんも、本当に紙一重でした。提案していただいたものは、行政としても参考になることが多くありました。私は企画振興部で各部の取りまとめをしていますので、こんな素晴らしい提案があったと、ぜひ県庁内で共有したいと思っています。公共政策コンペということで気付きを与えていただいたことに感謝し、こういった場を設けていただいた熊本大学にも感謝します。

熊本県知事賞は「やつしろ DX2nd team12」に授与しました。近年は自然災害が頻発しています。地震は事前に避難するというのはなかなか難しいのですが、洪水等は事前に避難することは可能です。ただ、現実問題としてなかなか事前に避難していただけておりません。

今回提案いただいたような技術の力を使って、いち早く安全な所に避難していただく。これは全国の自治体が、今しのぎを削って実際にやろうとしていますし、県内の自治体でも取り組んでいる所があります。

今回の提案をさらにブラッシュアップし、いい技術となって、全国的にも横展開ができるようなものになっていけばと思います。そうすれば令和２年７月豪雨の被害を受けた、熊本県としても全国の皆さんに恩返しができるのではないかと思っています。

熊本市 政策局長
田中 俊実 氏

私も公共政策を担う自治体職員として非常に勉強になりました。政策立案は、地域や社会における課題に対してこうあるべきだとか、もっとこうなればいいのにといった思い付きから始まって、それを実現するために解決方法を模索し、官民、地域等が一体となって実践につなげていくものです。その意味からも本日提案いただいたものは、どれもよく考えられていて、特に熊本市賞のMKレストラン同好会は、熊本の魅力発信の可能性を秘めている提案ではないかと評価しました。

提案を実現していくには、その過程でさまざまな制約が出てきます。例えば法令とか、許認可といった規制もあるでしょうし、実行するための財源やマンパワーの問題、住民の理解などさまざまな課題がそれに付随して出てきます。それらを含めて、どのように解決していくのか、クリアすべき課題が何なのかを分析して、エビデンスに基づく効果を検証し、一つのパッケージとしてまとめられたものが一番いい政策になっていくのではないかと考えます。特に行政職員の皆さまには、その観点を持っていただければと考えます。

今後、より一層多様化、複雑化する地域課題に対し、快適で持続的なまちづくりを進めていくためには、ICTやAIなどを活用した高度な政策が求められるのではないかと思います。若い方々の柔軟な感覚や発想、このまちをよくしたいという熱意を持った公共政策の提案を今後も期待します。

熊本日日新聞社 編集局長
毛利 聖一 氏

今日は貴重な機会を与えていただきました。40年ぐらい前の自分と、発表された皆さんのあまりの違いに、感心しながら聞かせてもらいました。

実は、昨日まで岩手に行き、陸前高田市の津波伝承館を見てきました。東日本大震災は被災してから10年経ちますが、地元の人たちが一番力を入れているのは、いかに後世に津波の怖さや避難の大切さを伝えていくのか、ということです。それが一番印象に残っています。グランプリのRED LABさんも、そこに焦点を当て、子どもや若い人たちに災害の教訓や防災の意識を伝えていくのか。しかも、決して上からの目線ではなく、自分たちが楽しみながら、やれることをやっていくという姿勢に共感しました。

熊日賞は渡部ゼミの方に差し上げました。たかが漫画、されど漫画というところもあって、私自身、漫画の可能性について、可能性や潜在力のようなものに気付かされました。それをテーマにやっていって、まんがミュージアムという施設をこれからどのようにして生かしていけばいいのか。今日の発表は、一つの示唆があったように思います。大学生の皆さんの知恵がどんどん結実していけばいいなという思いで選ばせてもらいました。

熊日も、マンガを活用した地域づくりを一緒に盛り上げていきたいと思っています。これから一緒にフォローしてもらって、皆さんの知恵を借りながらやっていければいいなと、そんな気持ちになりました。本当にいい勉強になりました。今日はありがとうございました。

熊本商工会議所 専務理事
坂本 浩 氏

長年この賞に携わってきましたが、今年は特にレベルが高かったなという気がします。

コロナ禍の中で、非常に苦しい状況にある方々が多い中で、若い力でこの熊本を支えていくことが必要だと思います。2023年には新しい熊本空港がオープンし、2024年にはTSMC（台湾積体電路製造）が来るという、すごいことが熊本で起こります。そういう中で、まだ就職していない方も今後社会人になっていく中で、熊本というのは非常に面白い場所だなと思っていただければと思います。

今日我々が表彰した「チーム子飼」は高校生の皆さんです。高校生の方々は「商工会議所って何？」と思われているかもしれません。東京商工会議所は設立して150年、熊本商工会議所は全国で9番目にできて、今142～143年ぐらい経っています。

子飼商店街など商店街の疲弊がひとつの大きな課題の中で、今回どの審査員もチーム子飼を表彰したくてしようがなかったのですが、うち（商工会議所）に表彰させてくださいとお願いしました。

高校生の方々が熊本を変えていく、そういうパワーを今後出していただけるように、大河ドラマの吉沢亮（渋沢栄一？）が今日表彰したと思っていただければと思います。新しい未来を背負っていく若い人たちの中で、一番若い方々を表彰できたことをうれしく思っています。

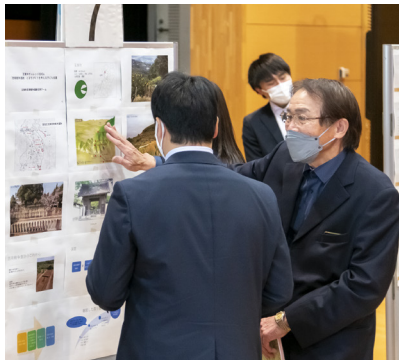
熊本大学理事
熊本創生推進機構 機構長
大谷 順

私自身も公共政策に対し様々な立場でものを見ることを拝見させていただき、非常に勉強になりました。学生、県や市の方、企業の方、いろんな立場で問題を解決するための考え方が相互に情報共有できたのではないかなと思います。

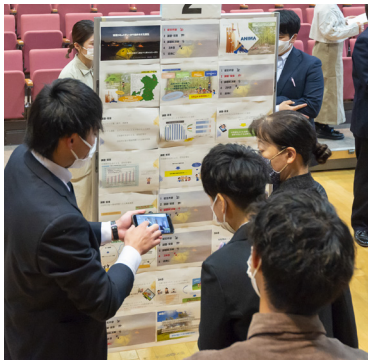
大学は人材を育成することが非常に大事です。その次に研究力を高める。世界的にとがった研究をしなければならないという大きな使命を持っています。また社会連携、地域連携に力を入れています。その一番拠点になるのが熊本創生推進機構の先生方です。地域や社会ともっと連携して、国をよくする、地域をよくする、ひいては大学の立場をしっかり見せていくのがこの機構です。最近、「共創（きょうそう）」という言葉がキーワードになっています。共に創造する、まさにこの政策コンペというのはそういうものかなと思います。

RED LABに熊本大学の賞を出しました。このコンペの目的にしっかり沿って、災害などに対して一番重要な事項を扱った提案ではないかという意見がありました。避難行動をもう一押しするという意味の提案で、非常に評価も高かったということです。

最後に、熊本大学熊本創生推進機構を代表しまして、今日参加いただきました皆さんと実際に運営いただいた方、またここに審査員として来ていただいた方々にあらためてお礼を申し上げます。ありがとうございました。



ローカルイノベーション
熊本を元気にする地方創生



国立大学法人 熊本大学
熊本創生推進機構 地域連携部門

〒860-8555 熊本市中央区黒髪２丁目39番１号
tel 096-342-2044 fax 096-342-3239
https://www.kumamoto-u.ac.jp/kenkyuu_sangakurenkei/sangakurenkei/kico